
一部50円です

無益な殺生

淡路島の海辺の小さなキャンプ場での出来事である。釣りを楽しもうと釣具屋で糸と針、竹竿を買い、浅瀬につき出た栈橋に上った。海中を見るとたくさんの魚が泳いでいる。これなら簡単に釣れるだろうと思い、焦る気持ちをおさえながら仕掛けを作って群れの中に投げ入れた。

しかし、なかなか魚は食いつかない。餌や仕掛けを取り換えて投げ入れるが、あたりがこない。子供たちに自慢の釣りを見せてやると言った手前、何としても釣りたかったのである。私の言葉を信じて見に来た子供たちも、なかなか釣れない様子を見て引き揚げてしまった。

ひとりになった私は、釣らなければ面目がつぶれると思い、餌をあたり一面にまいた。すると、撒き餌に魚は群がってきた。大きな魚の魚影もみえる、さっそく仕掛けを投げ込む。すぐにあたりがきたが、つり上がってきたのは手のひらにのるぐらいの小さなタイの子だ。すぐに釣り針をはずして海に帰そうとするが、食い込んだ針はなかなかとれない。やっと外れた頃には、もう魚は死んでいる。

釣った小さなタイの死骸が栈橋の下に浮かぶのを見て、私の心は怖気づいた。「ああ、おれは、なんとむごいことをしているのか。一時の気まぐれのために、こんなことをして…」すると、もう一人の私が叫ぶ「何を怖がっているのだ！おまえは魚釣りにも怖気づくような軟弱な男になってしまったのか！」

殺してしまった魚が白い腹を見せながら水面にぷかぷか浮かぶのを見て、もうこんなことはやめようという思いが込み上げてきた。自分が釣りにも怖気づく弱い気持ちしか持たなくなってしまった男だと開き直ったのである。苦々しい思いが、吹っ切れた瞬間であった。それからは釣りをしなくなった。

幼い頃、生き物をいたぶって遊んでいた私を親たちは「無益な殺生はするもんじゃない！」とよく叱ったものだ。その記憶が頭の片隅に残っていたからかもしれない。(嘉)

死をめぐるあれやこれ(3)

石川 吾郎

「今日は死ぬにはよい日だ」

(Today is a good day to die.)

この言葉を初めて知ったのは、たしかネットのギリシャ語学習のサイトだったと思う。そんなわけで、ギリシャかローマの格言かと思っていたが、実はアメリカの先住民の言葉だという。この言葉に出会ってから私はころころの中に、何か不気味な棘のように引っかかるものを感じ続けていた。◆この言葉を発することができるのはどんな場面なのだろうかと考えてみる。「今日、死ぬ」というからには自分が死ぬことを覚悟している。しかもそれが今日だ、ということとは死ぬことを自分の意志である程度コントロールできる状況にあるはずだ。病死や老衰死では自らの死をコントロールはできないはず。それができるとすれば、自殺か負け戦(いくさ)を覚悟した戦闘だろう。◆調べていくとこれはどうもアメリカ先住民の、出陣前の戦士の言葉であったようだ。しかしこの句を有名にしたのは、ナンシー・ウツドという女性が次のような詩を含む本で、アメリカ先住民の智慧の言葉を紹介してからのようだ。その詩とは、「今日は死ぬにはとてもよい日だ。あらゆる生あるものが私と共に仲よくしている。あらゆる声が私の内で声をそろえて歌っている。すべての美しいものがやってきて私の目のなかで憩っている。すべての悪い考えは私から出ていってしまった。今日は死ぬにはとてもよい日だ。私の土地は平穏で私をとり巻いている。私の畑にはもう最後の鋤を入れ終えた。わが家は笑い声で満ちている。子どもたちが帰ってきた。うん、今日は死ぬにはとてもよい日だ。」(Nancy Wood, Doubleday) ◆(二)には、平穏で満ち足りた死を迎える人の姿が描かれている。

改めて「ありがとう」

今日の午前中は誰もこないはず、
 と思って「花子とアン」に集中。イ
 ヤでも戦争中なのが思い出され途
 中「プツン」と切る。

「ピンポン」「宅急便です」私の応
 待弁は、「お金は」「不要」短いコ
 トバで終る。開封せず、筋書きが出
 来上がっている雑文に鉛筆を走らせ
 る。作者のような気分になるのが不
 思議。

人生五十年の時と違い、いまや人
 生八〇年、ともすれば一〇〇年とい
 う時代。老後がこれだけ長くなった
 ならこそいろんな事を考えるように
 なった。

年をとったからといって、自分に
 出来ることでも年のせいにして投げ
 出したり、あきらめたりすることは
 大嫌い。やってみよう。手を抜き始
 めると、どこまでも手を抜いてしま
 うのが人間というもの。

「オシャレ」だけでなく生活全体
 について言えるのではないだろう
 か。

大正末期より前の女性たちは、家
 業の手伝い、家事も介護も、子育て
 も女性一人でやるのが当たり前。い
 やおうなく、「女はこうあるべき」

「妻はこうあるべき」

「長男の嫁は弟妹の面倒見、親の介護
 は当然」という道にルールが敷かれてい
 た時代。それに耐えて人生の幕を閉じよ
 うとしている。

弟妹から、「あんたは他人やで」とあ
 びせられたコトバが忘れられない。十月
 には、主人の七回忌をつとめようとして
 いる私の心に、未だに拭い去れないの
 だ。何故。

でも、善意に解釈したら、またしても
 くじけそうになった時、老いぼれた心に
 叱咤激励になり、今まで生きてこれたの
 かなあとと思うようにしている。

犬のフン

ちよつと、おばちゃん、と肩をたたか
 れてビックリ。「ワンちゃん、ウンコし
 ましたよ。合図してましたやろ」「ヘエ、
 そう、ついうっかりしてましたわ。ゴメ
 ネ、ご親切に。ご丁寧に走ってきてまで
 知らせてもらって」知らぬ顔の半ベエ
 と思ったのか、振り返ってにらみつける
 んだから。

まだ若いのですのやろ、笑顔で知らせて
 くれないかしら。相手の身になったら、
 又、フンを放つたらかしてる。迷惑やで
 エー表情が語ってたわ。犬のフン、猫の
 ふんで私も随分困ったから、よくわか
 る。ゴメン、でも犬のフン持ち帰らな
 かったことないのやけど。

あの若い人、よほど犬が嫌いなんだ
 わ。これから気をつけなきゃ…。

安ベエにいつてきかせた。これから
 ウンコをするとき、ワンとかスンとか
 信号送つてや…、何いつてんのや、安
 ベエきよんとんととして鼻をならして
 すりよつてくる。可愛い…。

壱円玉

“壱円玉の旅がらす、一人ぼっちで
 どこへゆく”

さおりさんの歌うこの曲がNHKの
 「みんなの唄」で初放送されたのは一
 九九〇年二月のことである。

前年四月に三%の消費税が導入され、
 買い物や支払いにお釣りの壱円玉の
 出番が増えてきた。今年の四月から消
 費税五%から八%になり、壱円玉の端
 数が出やすくなった。

買い物客のサイフの中からレジへ、レ
 ジから財布へ、忙しく旅する壱円玉が
 多くなった。

壱円玉が増えると小さなさい銭用の
 財布に納まっていたが、「平成二六年」
 と刻印されたピカピカの壱円玉が走
 り廻っている。

好景気のパロメーターといわれる
 ようになつて欲しい、とサイフの中の
 壱円玉に呼びかけている。さもしいの
 だろうか。

俳句

初秋やことに目にしむ花の白
 韓国は近くて遠し花木槿
 枝先の花束ゆらし百日紅
 廃校の庭を自在に赤とんぼ
 ふるさとは今も変はらぬ虫浄土

土田裕

編集後記

私も、体調がだいぶ良くなってきましたの
 で、AOさんのダイエットを見習って、減量
 に励んでいます。きっかけは、正月に登った
 愛宕さんとボンボン山です。親しい友人たち
 と登ったのですが、自分の体力の無さにあき
 れて、「これではいかん」と一念発起しました。



朝晩一時間歩き、食事は半分にし、晩酌は
 やめました。すると見事に体重は減りました。
 暇があれば歩くことにしています。まだ道半
 ばですが、何とか七〇キロまで頑張りたい。
 九五キロから七〇キロです。25キロダイエ
 ットに挑戦です。今後よろしくお願いま
 す。(嘉)

梵店主

現実の世界

ガンを患う女性客とノッポさん、ふたりの言葉から病気を発病する原因にストレスが関係していることがわかった。

よっちゃんのような自己免疫の異常は電子顕微鏡の世界でしか見つけられない。見えないミクロの微妙な細胞の小さな変化がコピーされたように増殖し、やがて身体中にひろがっていくらしい。

正常な細胞ならば、互いに助け合って身体を維持するのだが、突然変異した細胞は、敵対行動をとるのである。味方が味方を攻撃するのである。なぜそうなるのかは解明されていない。

何らかの遺伝子と有害物質が反応して細胞の変化を生み出すのかもしれない。我々が生活している環境の中に潜む有害物質は日々増え続けているから、今後も病名がつかないような症状を訴える患者が増えるに違いない。

よっちゃんもストレスをそれなりに受けていたとは思いますが、過去のことを考えないようにした。色々考えると病気に負けると考えていたからだ。わからない病は医者に任せておけばいいのだと、なるようにしかならない開き直りからであっ

たが、不安は抑えきれない。

そんな時に親しい先輩の奥さんから手紙を頂いた。それはよっちゃんの心をとろかせるような文面であった。

下村さん

びっくりするニュースを聞いてからずい分日が経ってしまいました。健康の代表の様に思っていた下村さんがそんな病気になるなんて本当にびっくりです。事情がわからず何てお手紙を書いたら良いかと考えている内に自分が病気になるってしまい一〇mも歩けなくなってしまうました。

七月末に手術をして今はリハビリ中ですが、中々足のしびれは取れず、生きていく限りはこれとつき合っていかなければならないとほぼ諦めています。私はもう年なので仕方ないのですが、下村さんはまだ若いのですから色々な治療を積極的に受けてくださいね。

下村さんもお見舞いに来て下さったので覚えていらつしやると思いますが、里子が自己免疫肝炎という聞いたこともない病気になったのはまだ一〇才でした。当時の医者は「好きなことを何でもさせてあげて下さい」ともう何年もたない事をお任せしました。その後慢性肝炎に移行して二八才の時には胃から吐血して肝硬変になっていくといわれました。でも元々明るくアクティブな子で、そんな

病気をかかえながらも仕事をし、海外旅行にもでかけています。医者はいつても悪なことを言いますが、私はそうでない

例をいくつも見てきました。いつも送って下さっている新聞の中で見えますが、下村さんは自分のことも他人のことも良く理解していられるので私ごときがくどくど言うことではないかもしれませんね。

奥様が入院中に聖書を読破すると言っているのを教えて下さいました。私は自分の心が弱った時、いつも聖書の中のこの言葉を思い出し元気を出します。

それはコリント人への第一の手紙一〇章で「あなたがたの会った試練で世の常でないものはない。神は真実であるあなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか試練と同時にそれに耐えられるように逃れる道を備えて下さるのです」

こんな言葉がいらぬ程、強い方かも知れないのに。もしそうなら、どうぞ笑いとばして下さい。

足がもう少し良くなったからお見舞いに行きたいのですがご迷惑かも知れませんがね。くわしい事が何もわからないままに、少しでも良い状態になられます様に祈っています。支離滅裂な手紙でごめん下さい。

九月十二日

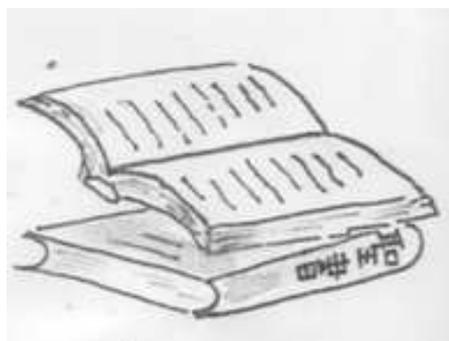
よっちゃんは、手紙を読んで熱いものがこみ上げてきた。弱り果てた心をやさしく撫で包み込んでくれるように思えた。

自分の気持ちを察して心配して下さっている相手の心配りを痛いほど感じたのである。

よっちゃんは、これまで人からもらった手紙を、胸がドキドキしてしまい、まともに読めないような小心者だった。しかし、この手紙を幾度も読むうちに手紙のかもしれない温かい心に気がついたのである。

飾らない言葉でありながら、その行間にいくつもの深い想いが重なり合って響いてくるように心に沁み込んだ。しゃべる言葉と違い、活字は残り、読み返すことが出来る。同じ手紙であっても、読者の状況次第で変わる。

よっちゃんは、この手紙をもらった時が最も苦しんでいた時期でもあった。誰にも弱音を吐けない、なんともし難い時を過ごしていたのだ。



死ぬとわかれば〇〇がしたい…の巻

何日か仕事でバタバタしていたら、親友のF子から電話がかかってきた。「大丈夫ですか？ 見守りの電話です」。何かの冗談なのだろうが、F子は重ねて「お元氣ですか？ 倒れたりしていませんか？」。まったく誰のフリをしているんだか。「だってな、ほんまに気になんねん。あんたが痩せてから、倒れたりしてへんかなと思て」と本気で言う。それで、保健婦さんになって(?)電話をくれたというわけか。たかが体重が減ったぐらいで。

そもそも、私のダイエットのきっかけは、このF子が少しづつ膨らんでいく私を心配して、「糖質オフ」なる健康法の本(ペラペラの文庫本である)を貸してくれたことだった。ところが、五キロ、一〇キロと痩せていくと、F子は心配し始めた。「アンタ、おかしいデ。そんなに痩せるはずないデ」。

え〜っ。「この本の通りにやってみ。絶対、痩せるから」と言うてくれたのはF子ではないか。「実はな、あの本を何人かに教えたけど、みんなすぐ挫折して、逆にリバウンドしたと言う子もおるねん」。

アンタだけ、しかも一〇キロやろ、変やデ」。

変やデって。「ガンいうことも考えられるやろ」。考えられませんでば!。実際、「ガンちゃうよね?」と何人かの友達に聞かれたし、そうは言わないけど、仕事先の人などに「大丈夫ですか」という態度で接せられて「あ、ガンやと思ってるな」と感じたことも何回かあった。「ガンじゃないですよ、糖質オフっていうダイエットなんです」と慌てて訂正しているけれど、なんせ、こっちはガン年代だ。否定しても、なかには「ふうん、隠しているんだ」と思っているときか思えない人もいたりして、ほんと、トシとると、おちおちダイエットもできやしない。

F子の電話は続く。「検査はしいた方がええと思うねん。もう長いこと、検査してへんやろ。梅田にHクリニックという女医さんがやってる病院があつてな」。

まったく、なんていう心配性なんだ。そこへいくと、ウチの親なんか薄情なんだか何なんだか、顔見るたびに「リバウンドしてないやろね」と疑り深い目を向けてくる。娘がガンかも?なんてこれっぽっちも心配していない。我が娘の父親、自分の夫がガンで死んでいるのに、遺伝するかも、などは考えないようだ(あ、そうか。だから八八歳まで元気に生きていられるんだな。しかしF子のお母さんはF子に輪をかけて心配性だが、九一歳

でお元氣だから、一概には言えないか…)。

F子推奨のHクリニックには行ってみるつもりだが、万に一つ、ガンだとわかったら、それ末期待とわかったら、私にはやりたいことがある。

親孝行。嘘である。親孝行したくないわけではないが、死ぬとわかって親孝行なんてハツキリ言つてつまらない。私がしたいのは、「日焼け」。

もう生きていなくなるのなら、私は思いつきり太陽に肌をさらして日焼けがしたい。シミになろうが、シワができようが、黒皮症になろうが、へっちゃら。どうせ茶毘にふすのだから、お肌を気にすることはない。

「その顔で?」と言われそうだが、私は結構若いころから「日に当たったら、シミになる、シワになる」と恐れて、日傘をさしたり、帽子をかぶったり、紫外線対策をしてきた。そんなだから、もう長いこと海へ行っていない。姉一家が義兄の回復祝いを白浜でやって、そのとき姉の孫たちと海水浴をしたが、私はほとんど「海の家」もどきの日よけの下で、帽子をかぶってビールを飲んでいた。その昔、甥っ子と弟と三人でハワイへ行ったことがあるが、そのときも長袖を着て、夕方になってから海へ入るなどして、弟と甥にイヤな顔をされ、ビーチを歩くときは他人のふりをされた。ワイキキで日傘をさして歩いている人なんて当時は

なかったからだ(今はいるかもしれない)。

何年か前から、日焼けしてもしなくてもシミはできるしシワが寄ると諦めの境地に達してはいるが、それでも長年の習慣で、太陽光を危険視してしまう。本当は、太陽光が大好きなのに。

だから、死ぬと決まったら、私は南海の海へ出かけて、日がな一日、波打ち際で暮らしたい。太陽光線をガンガン浴びて、暑くなったら海で泳ぐ(スポーツも苦手だが、水泳だけはできる。大昔、浜寺の水練学校に行っていたからだ)。砂浜に寝ころがって、空を見て暮らし、夜明けとともに海につかる。最後の蓄えなんて大してあるわけじゃないが、どうせ死ぬのである。全部、おろして使い、残り南洋の島で仲良くなった(いつの間にか?)貧乏な一家にみんなあげて、その家族から「アリガト、アリガト、このお金で、キト(娘)を学校に行かせられる」と感謝されるのもいいかもしれない。もちろん、妄想である。キトって誰?と聞かれても、私にもわからない。日本の一〇円が現地ではすごい値打ちがある、という前提の上での妄想である。

問題は、そうやって海辺でぶらぶら暮らして、ミネラル水(海)に浸り、日光消毒をしているうちに、ガンが治っちゃった場合である。最後の蓄えは南洋で使い果たし、顔も体も異常なシミ・シワ。どうするんだ、私?(A〇〇)

家庭内のコミュニケーション

伊藤明(精神科医)

◆「家庭内交信障害」

私の外来には、うつ的な症状を訴える中年の女性が多く来られます。体がだるく、しんどい、頭痛がするといった身体の症状を訴える方でも、よく話を聞くと家庭の問題、夫婦の問題をかかえて悩んでいる場合が多いのです。その中でよく出会うのが「家庭内交信障害」とでも言いたいケースです。家庭の中で夫婦の間や親子の間で、意志や感情をうまく伝え合えていない場合です。ありふれた例では、妻が夫にお茶をいれてあげた時、夫が「ありがとう」とも言わず無反応な場合。これは単に習慣の問題にすぎないと言おう方もいると思いますが、こういうこととの奥にはかなり大きな問題がひそんでいるのです。というのは、意志(愛情)のキャッチボールが一方通行に終わってしまっているからです。妻が投げたボールに、夫は返球してこない、少なくとも妻にはそう思える。一方が相手のために何かをしてあげても、言葉で反応が返ってこないことが積み重なると「私がなにをしてあげても、夫は何も言ってくれない。いったい何のために私はやっている

のかわからない」ということになり、「夫にとつて自分の存在は何なの」との疑問がわいてきます。

◆言葉のかけ合いは不可欠

このような例で夫の言い分をたずねてみると、「当然感謝はしている。それはあたりまえでわかり切ったことだ。それを取り立てて口に出して言うこともないと思っている」というような言葉が返ってきます。ここには照れくささや、気恥ずかしさ、あるいは妙なプライドというよくなものが感じ取られます。しかしあいさつの言葉、ねぎらいの言葉、感謝の言葉、あるいはほめ言葉をお互いにかけてい、これによつて相手を認め、評価しているということ表現するのは日常生活に不可欠なことです。これは改めて言うほどのことではないかも知れませんが、職場など家の外では実行している人でも、家族に対しては言わない人(男性に多いのですが女性にもあります)は案外と多いものです。

◆言葉によるコミュニケーションが重要

言葉によるコミュニケーションに対して、身ぶり、表情、しぐさ、雰囲気など、言葉以外のコミュニケーションというものは確かに存在しています。これらは時として、言葉によるよりも雄弁に語る場合もあります(目は口ほどに物を言い)。しかし一般的に言うと、これらは言葉に

よるものと比較して、あいまいで受け取る人によつていろいろな意味にとれる(多義的)という特徴があり、うまく気持ちが伝わるとは限らないものです。上の夫婦の場合、夫は自分の気持ちがすでに「察しられている」ものとみなしてしまっているのに対し、妻は全くそのようには感じていないこととなります。

日本の(男性)文化の中では、言葉以外のコミュニケーションに重きがおかれることが多く(以心伝心)あるいは「黙つてオレについて来い」、言葉によるコミュニケーションに対する軽視がいまだに根強く残っており、それがプライドともつながっている場合が多いようです。しかしその結果「交信障害」を生むことになるのです。

◆言葉の少なさが生む「こころの習慣」

子どもに目をむけてみると、言葉のコミュニケーションが少ない家庭、あるいはそれがあつても大人から子どもへ一方的に行われている場合、子どもは大人のこころの動きを表情やしぐさなどで読むことを必然的に訓練させられることとなります。このような状態が長く続くと、相手のこころを先読みする習慣がついてしまいます。これは例えば、相手が無機嫌そうな顔をしているのは、自分に対して何か悪く思っているに違いないと「察

して」しまうようなたぐいです。しかし実際には、相手は体調が悪くて、さえない顔をしていただけかもしれないのです。このように相手の顔色を読む、気もちを「察して」先取りしてしまう習慣(これほどちらかといえれば弱い立場におかれた人に多いのですが)、「うつ」になりやすい「こころの習慣」となるのです。

◆言葉を出しおしめない

言葉によるコミュニケーションが多い、あるいは少ないというのは、家庭内の文化とも言えます。この文化は、家庭内をつくる夫婦が、それぞれのような家庭で育ってきたかに大きく影響を受けていると想像されますが、これは少しの努力によつてかなり改善することができます。うにおもいます。感謝の言葉、あいさつ、ねぎらいの言葉などがうまく使えないと感じる場合は、その言葉の使用基準を下げる。出し惜しみしないで気楽に使うことがポイントです。他の人が自分のために何かしてくれたことに気づいたとき、そこで自動的・反射的に感謝の言葉が出るようになれば上々です。この場合、本当に心がこもっているかどうかは(極論すれば)二の次でよいと思います。というのも、こころの中で十分感謝していても言葉に出さない場合と、内心さほど思っていないくても感謝の言葉を言うのを比較すると、確実に相手に伝わるのは後者だ

からです。

◆夫婦間のチリを払って

特に夫婦の間では「以心伝心でわかってくれるはず」という錯覚や甘えがあり、言葉のキャッチボールがおろそかにされることが多いようです。相手に反応がない場合、ひとりで嘆いてばかりいないで、やんわり言葉を請求してみる（うまく相手を教育する）くらいの発想があってもよいと思います。夫婦というのは、その歴史が長くなると、いつのまにかこのようナチリがお互いの間に積もっていたということがあるものです。時々そのチリをチェックして、払っていくことをおすすめします。

◆最近の変化

ただ昨今の事情は、日本的なコミュニケーションはかなり変化をきているようにも思います。言葉によらないコミュニケーションが相手に伝わりにくいということが、かなり当たり前になってきている。そこで日本の社会の中でも言葉によるコミュニケーションに比重が置かれる傾向が大きくなってきていると思います。これはたとえば職場での人間関係においても、家庭においてもいえそうです。私が身を置いている医療の現場では、この十年ほどの間に様々な種類の契約書類（治療や各種の検査や手術の時の同意書など）が急増をしています。これはこ

れで必要なことであるだろうと思います

が、これは対人関係の信頼の不安定さを反映しているようにも思えます。少ない信頼関係の上で何かを行おうとするとき、ことごとく書類に書かれた言葉よる契約が必要になってくる。それが制度として強力に推進されている。このことは家庭の中の人間関係に反映しないはずはないように思います。言葉で表現されづらいこと、かつては「以心伝心」で伝わっていたこと、ないし伝わっていると考えられていたことが、全く伝わらないという場面に直面することが多くなっているように思われるのです。こういった傾向は、深い信頼関係の上に成り立っていた（と感じられていた）家族間の関係が、実は、もろいものに変質してきているようにも見えてくるのです。

B級サラリーマン渡世譚 17

挨拶回り

明石幸次郎

総務部のS係長に呼び止められ、明石は改めてS係長の前に行き、転勤の挨拶をした。すると、いつも辛口のこの人がニコニコ笑いながら

「どうや、S工場は厳しかったやろ？」

あそこは、全工場の中でも一番管理が厳しい工場やと聞いているが、明石も温室育ちの本社資材部から移ってまあ、2年間ノイローゼにもならんと、よく勤まったなあ。あの工場は、自分らがコツコツと利益を上げて、本社を食わせてやっている意識があるから、その本社から転勤してきたと言うことで、苛められたやろ？」

「まあ、転勤した当座は余所者扱いさ、苦労しましたよ。本社で野球部に入っていた言う情報が誰かから伝わり、工場のソフトボールのチームに誘われて入ったら、直ぐに周りから仲間扱いにされ、それから仕事もやり易くなりましたわ」

「そうか、そういう手があったか。工場の現場の連中はそう言うところがあるなあ。一緒に汗かいて運動したら、仲間意識が生まれてくるわなあ。そこは、本社と違うところやな。処で、輸出部の連中はテレックス室に入ったりして、入電したテレックスを見に来たり、打って貰っ

たりしてるぞ。若い奴が2、3人、入れ替わり立ち代わり来てるわ。アンタのことやから、暫くしたら、無理を頼まなアカン事があるやろ。ねえさんに挨拶に行つた方がエエで」

「そうですか？ 処で、ねえさんは誰でしたか？」

「Sさんや、知らんか？ 顔見たら、直ぐ思い出すわ。一回見たら、忘れへんぞ。」

おい、Kちゃん、テレックス室へ案内してやったって、アンタの同期、Sちゃん知らんらしいぞ。序にこの書類渡して来てくれるか」と言うことでK君の案内でテレックス室の方に歩いて行った。その部屋は電話交換室があった部屋で、明石が入社2年目までは、外部から掛かってくる電話は、全て交換室に入ってきて、交換手はその電話を聞き、内部の電話に繋ぎ「明石さん、N社のAさんからお電話です」と、明るい声で外部から掛かってくる電話は交換手がこう言つて繋いでくれた。

当時は会社に電話を掛ける時は、代表局番というのがあって、その番号に掛けたら、部門名と相手の名前、掛けた人の名前を交換手が聞いて、電話を繋いでいた。外部から掛けた人は、その交換手の応対によって、その会社の印象が良いとか、悪いとかを判断することが多かった。応対に問題があると（掛けてきた人の問題は別として）会社の総務部、秘書室、人事部などに、お宅の交換手は応対が悪



京都、姫さま強盗殺人事件(巻二九・八)
 今回は平安の都で実際に起きた殺人事件の顛末です。現代ならばさしずめ恰好のワイドショーネタになると思われます。また山村紅葉でドラマ化されるようなものかも。内容はかなり刺激的なので、教科書にでない度は四／五です。

* * *

今は昔、下野の守藤原為元という人がいた。家は三条大路の南、西洞院大路の西の辻にあった。

十二月の末の頃、その家に強盗が入った。隣家の人まで気付き大騒ぎをしたので、物はたいして取れず、包囲されたと思っただけの強盗は、その家にたまたま身を寄せていた皇族の血をひく高貴な身分の女房がおられたのを人質に取って、抱きかかえて逃げていった。さらに馬に乗せかえて三条大路を西の方向に逃げていく。大宮大路の辻に出ると追っ手が迫ってくると思え、この女房の着る物を剥ぎ取り、女房はそこにうち捨て、強盗はそのまま逃げ去ってしまった。

女房は気も動転し、裸のまま「怖い、怖い」と思っているうちに周囲は漆黒の闇、大宮川に落ちてしまった。川には氷

そうなので

「仕事でお世話になると思いますので、これからちよくちよく来ますので、宜しくお願いします」とこの度の転勤で人事部を皮切りに回った中で一番丁寧にこのSさんに頭を下げた。

それから、Sさんは、メンバーの一人一人を名前を言って紹介してくれた。少し話をただけでも、皆明るくて、生き生きと仕事をしている雰囲気を感じられて、何となく気分が爽やかになった。これもリーダーのSさんの人柄が職場の雰囲気にも反映していると思った。明石は、女性ばかりの職場は今まで何となく敬遠していたが、これなら、いつでも、気分転換に仕事を兼ねて行ける場所ができた嬉しくなって、K君が連れて来てくれたことに對する、礼の言葉も掛けず、「おーい、K。俺、時間がないので、戻るわ。又なあ」と言ってテレックス室から出た。

挨拶に来よった。そしたら、S係長から

ここにも挨拶に来て行ってやれということ、お邪魔しに来ましたよ。さぼってるかをチェックしに来たんと違うで」

「Kさん、分っているわ。アホやなあ。ドアの開け方で誰が来たか分かるわ。知らないのは本人だけよ。ハッハッハァー。知らなかったやろ。みんな、Kさんが来たときノックの音で大体わかるんよ。明石さん、どこかで見た顔やなあ」と大きな口を開き、にっこり笑いながら問われた

「はあ、二年前は資材部に居ました。M課長の処に。それから2年程、S工場に修業しに行つてまして、今度、輸出部に行けと言われ、換つて来ました」

「エエね。輸出部で良かったよ。国内営業なんか、泥臭くてしんどいらしいよ、明石さん。このKさんなんか、どこも行けとまだ、言われてないのよ。あつちこつち、行けと言われたら、素直に従わないとサラリーマンは勤まらないよ。処で、明石さん今度、輸出部へ転勤やと言われた時、何か上司に文句を言ったのと違う？」と鋭く突っ込まれ

「何で分かりますの？」

「そんなん、アンタさんの顔に書いてますやん」と、さすがにねえさんは言うことが違つと、顔は覚えていたが仕事を通じて接点がなかったたので、このSさんと今まで話をすることが無かつた。これから、仕事で接点が出来、話をしたら面白

いとか、口のきき方がなっていない、社員教育はどうなっているのかなどの苦情が入ってくる。そんなこともあり、電話交換室は総務部が管轄していたが、交換手の女性に對する躰、教育も厳しかった。会社の人事部もそこは、性格の良い、機転が利き、声が明るい、頭の回転が速い、容姿は二の次でも、適性を考えた女性を配属していた。若干、受付の女性とはタイプが違つていた。昭和五〇年位から、ダイヤル・イン方式に電話が変わつたために交換手が要らなくなり、交換手の女性はそのまま、テレックス室と衣装替えをして、彼女らも職種替えをした。当時はFAXとか電子メールがまだ出現してはなく、海外向け電話がまだ高く、郵便で送るには遅いので、通信手段として、テレックス通信というのがあつて、専用の機械のテープにタイプでパンチをして、テープを読み取る専用回線で送つていた。海外からはテープが山のように入ってくるため、急ぎで見る必要があれば、輸出部のメンバーは朝から、このテレックス室に詰めていた。

K君は自分の持ち場だけに、テレックス室に形だけのノックをして、ドアを勢い良く開けて

「誰かサボつてない？」と笑いながら入つて行つた。明石もその後をついて入つて行つた。K君はまず、Sさんに近寄り「こいつ、同期の明石や。今度、輸出部に変わつてきたので、俺のここにも序に



がはり風も限りなく冷たかった。水からはい上がつた女房は、付近の家の門を叩いたが怖がつて誰も出てくる者はいなかった。とうとう凍え死んでしまった。そして野犬に食われたのだった。翌朝、長い黒髪と血に染まった赤い頭と、紅い色の袴が切れ切れになって氷の中に散乱しているのを人々は見たのだった。

その後「もし、この強盗を捕らえて朝廷に引き出した者には、褒賞を与える」という帝の宣旨が出されたといつて、都中の噂になった。犯人としては荒三位とあだ名された藤原道雅という人に嫌疑がかけられた。というのも、この荒三位があつた野犬に食われた姫君に言い寄つて断られたからだ、とは専らの都の噂であつた。

そうこうする間、検非違使の左衛門尉平時道が、命じられ犯人の捜査にあつたが、たまたま奈良方面に下つたことがあつた。山城の国柞の杜(現在精華町・祝園)という所で、一人の男に出会つた。

その男、検非違使を見て道を譲つてひざまづく様子が、そわそわして挙動不審なので、これを捕らえ奈良阪まで引き立て、「おまえは罪を犯したものに相違なからう」と厳しく問い糾す。男は「そんなことは致しておりません」と抵抗してしたが、さらに拷問して問い糾すと、「一昨年

の十二月の末ころに人に誘われて三条と西洞院の辻にあつた貴人の邸宅に押し入り、物は盗れず、身分のある女房を人質にとつて、大宮の辻に捨てて逃げました。その後聞くところによると、その人は凍え死んで犬に食われなかつたということ

です」と男が言う。これを聞いて、時道喜び、その男を都に連行してこの事情を申しあげた。都では「時道は、太夫の尉まで昇進だ」と評判であつたが、その褒賞はなかつた。これはどうしたわけだろうか。必ず褒賞を与えるという宣旨だつたのだが。だがやがて時道は位を授けられ、左衛門の太夫に出世した。これは世間がみな非難したからのことであろう。

この事件を振り返ると、男はむろんのこと、たとえ女であつても寝場所には十分注意しなければならぬ。うかつに寝たりしていたから、こんなふうに入質に取られてしまったんだ、とは人々が噂したと語り伝えていふことだ。

《終わり》

《コメント》

この話は何といつても、お姫さまの悲惨な最期の描写が、生々しく印象深い話です。平安末期の刑事事件の事件簿といつた趣があります。この強盗事件は実際に起こつた事件で、被害者は実は天皇の皇女という身分の方であつたようです。

またこの事件の裏では、本文にあつた荒三位・道雅がかかわつていたとのことです。荒三位が女性に言い寄つて断られた腹いせに、男を使つて事件を起こしたといふのです。首謀者が三位という高官であることから、実行犯逮捕の後の褒賞に、朝廷は消極的な態度をみせたようです(以上は、岩波文庫本の解説より)。いつの時代でも、警察や司法は、権勢に弱いものだと思います。

またこの話の中で、犬の存在が気になります。当時の都には多くの野犬がいました。それらは普段は、人糞を食らつていふような情けない存在です。このことは「今昔物語」の話の中にも出てきますし、「病草紙」の中にも、ひどい下痢をしている男のそばに犬が関心を寄せて近寄つてきている場面が書き込まれていることから解ります(「病草紙」は京都国立博物館の常設展に展示されることがあります)。しかし死人が出たときには、その遺体も食らつていたのがこの話しでわかります。芥川の小説「偷盗」では、主人公が野犬の集団に襲われる場面がありますが、おそらくは大の大人を襲うことはあまりなかつたのではないでしょうか。

また、この話者の最後のコメントの天然ボケといつていいようなおとぼけぶりですが、私は大好きです。

死の問題はこの「芥川だより」でもテーマとして取り上げられている人も多く一定の世代では関心があります。しかし一般に昔に比べ死は隠蔽されており、またそれが恣意的になつてきている。隠蔽といふのは、病院で死ぬということと重なる。昔は死は身近なもので、それが日常に見えました。しかし現代では死は隠されていふ。恣意的といふのは死が自然ではなくなつていふことと重なる。医療科学の発達により延命治療は自然の死を奪い、人間によるコントロールを可能にしています。

二〇世紀最大の哲学者と言われるハイデガーは、自分自身の存在の否定即ち死を知っている唯一の現存在として人間を分析するなかから「存在」そのものの本質、すなわち「在るといふこととはどういうことか」を探ろうとしました。少し難しくなるがハイデガーはその主著「存在と時間」の中で三つの存在の「非」を時間軸で対比しています。まず人間は「過去」において「無根拠」つまり理由なく生まれた。そして「現在」において、人間は自分が必ず死に向かう存在として在るといふことを忘れ「非本来性」に陥つている。そして「将来」自己の死によつ

て「非存在」になるという。この三つの非や無によって人間は「不安」を持つという。

では、なぜ人間は死に対して不安を持つのか。今回は自分と自分以外の世界は死後どうなるのか、この二つの状態がわからないから不安になると説明しました。それでは今回は不安を持つのはどうしてかということを考えましょう。

人間だけが死を恐れるでしょうか。いや、そのようでもありませんね。ライオンに襲われているシマウマは必死に逃げようとするし、蜘蛛の巣にかかった蝶々も羽をバタつかせ逃げようとしています。この動物の行動は死に対する不安のようにも見えますが多分危険に対する条件反射でしょう。不安とは心の問題、感情だからです。感情とは喜び、驚き、悲しみ、嫌悪、恐れなどの気分とその表現です。

人間以外の動物には心はないといいますが、心とはなんなのでしょう。心はなんのためにあるのでしょうか。諸説あるのですが私の興味のある考えだけを話しますので、どうもそうでないという方はいろいろ調べてください。人間の記憶と関係がありそうということです。人間の最大の特徴は言葉を持つということです。言葉というのは他人に自分の経験を伝えるという機能もありますが、自分自身の意識に体験の記録を残せるという機能もあります。これが記憶となります。どうやら、

心は言葉による記憶の意味付けを強化するためにあるらしいのです。恐ろしい体験は強く、楽しい体験は柔らかに記憶する。「クオリア」と言う哲学用語がありますが、言葉に表現できない体験も心が重み付けをして記憶するのです。この言葉

による記憶を獲得したことにより現在と過去の区分が可能になります。動物には条件反射以外の過去の記憶というのはありません。犬が昨日なにを食べたのか、猫が昨日誰と会ったのかは思い出せません。昨日会った人には実際にもう一度会うことにより匂いや形の体験としてしか学習できません。心の働きによる言葉とそれにもなう記憶がないからです。

過去を言葉によって獲得した人間はそれによって未来も手にいれることになりました。未来とは過去から現在の継続の延長だからです。これは経験によって獲得したと言えます。太陽はこれまでずっと朝、東から昇ってきた。明日もそうであろう。という理屈です。これによって人間は自分自身がいつか死ぬということを知るようにになりました。人間の進化が加えて自分自身の死の不安を持つようになるとは何か皮肉な理屈です。しかし、NHK番組による「病の起源」などを見てみると人間の進化による病気というのは本当に多いようです。

さて、NHKと言えば、この九月一日にタイミングよく「臨死体験 死ぬと

き心はどうなるのか」という立花隆さんの番組を見ました。立花氏は二〇年前に臨死体験をされた人のインタビューをもとに死んだら人間はどうなるのかをレポートされていました。それから現在、再び同じテーマに取り組まれた理由はその頃比べて脳科学が飛躍的に進歩していることと、自分自身が最近、がんを宣告

され余命が残り少なくなっているという動機からでした。臨死体験者に共通するものは、魂と思われるものが体外離脱しお花畑を過ぎトンネルの先で眩い光の中に神に出会うというものです。番組では

米国の脳神経外科の医師が六年まえに自ら臨死体験し、自分自身の臨床データから心臓が停止し脳の機能が失われた時期に不思議な体験をしたということが語られています。これは死んでも魂は残るとする「魂存在説」ですね。四歳の少年が自分の一歳数ヶ月ころの臨死体験を語り始める例も紹介されていました。しかし番組の後半では最新の脳研究成果とされる「統合情報理論」、心とは脳内の感覚、感情、記憶などの膨大な情報が複雑に繋がりがあつた意識だという学説が登場します。心とは脳の機能によるとする「脳内現象説」です。トニーノ教授によると意識も数式で表されるといいます。結局

立花氏は、脳はいい夢を見て死んで生きたいという人間の願望を実現するために機能的に出来ている、死は恐怖でないとい

言います。臨死体験者はそのことを伝えるために生還したと番組を結んでいてどちらかと言うと「脳内現象説」寄りです。しかしとても印象的だったのは、立花氏に臨死体験を取り組むきっかけを作った

ムーディー博士と再会した場面だった。博士は過去、なんらかの理由で自殺を試み臨死体験したらしい。それ以前は自身「脳内現象説」派だったが、それ以後は魂の存在を確信したという。博士は立花さんと別れの挨拶で、次に会うときは天国で心ゆくまで話そうよと言っていた。

私自身も立花氏に近い考えであるが、実際その時にならないと真実はわからない。それだけ人間の心は複雑で不思議なものです。このようにいろいろな角度で考えてみると、死が不安であるとは前回でも書いたとおり自分自身以外の家族などの残されたものに対する心配を除くと自分自身だけの不安の根拠はかなり怪しくなってきました。極端に言えば宗教を信じさせるための脅しのように思える時もあります。死後の世界があるのか、魂があるのか誰にもわかりません。善や悪、

快や不快、恐れや喜びのような価値や感覚、感情が生と死の境まであるのかどうかもわかりません。やはりわからないから人間は不安になるのか。人間の知識欲は際限がありません。さらに当たり前を考えるため哲学的思考の旅を続けましょう。

坂本一光

◆エネルギーの六形態と人間のエネルギー変換・利用の断片的紹介

エネルギーとは、字引的に言えば、物理学的な仕事に換算できる量の総称です。エネルギーの単位は、万国共通の約束でジュールです。その六形態とは何でしょうか。熱エネルギー、光(電磁波)エネルギー、電気エネルギー、力学的エネルギー、核エネルギー、そして化学エネルギーです。

エネルギーは、原理的には、相互に変換され得るものです。原理的にはというのは、直接的な変換の技術がなく複数のエネルギー変換過程を経ての変換しかないことがあるからです。また、面白いことに、直接変換が可能になった時期が何十万年以上もずれていることもあります。典型例は、熱エネルギーと力学的エネルギーの相互変換です。人類が、木と木を適当な工夫のもとに摩擦して発生する熱から火を得たのは遙か昔のことです。それは、力学的エネルギーの熱エネルギーへの変換です。火の使用は、食生活を一変させることで生物学的に人間からだを変化させ、また食文化を通して人間の文化的生活の全体にも影響を与えたはずです。この変換は同時に、力学的エネルギーの熱エネルギーへの変換が物質の燃

焼という化学エネルギーへの変換を引き起こし、さらには人間の闇からの一定の解放を意味する光エネルギーへ変換されたことでもありました。火の意識的な利用は、その後の金属の精錬にもつながるものであり、人間のエネルギー支配、自然支配の巨大な第一歩であったといえる出来事です。

しかし一方で、その逆の変換、すなわち熱エネルギーの力学的エネルギーへの変換には長い年月が必要でした。時代が明確にその変換を要求したのは、イギリスで工業化社会への変化が始まった産業革命のときです。一八世紀の中頃、ワットによって蒸気機関が実用化され完成の域にまで改良されます。熱を加えられ沸騰した水はもはや元の水にあらず、蒸気となり体積はおよそ二千倍にも膨張します。その膨張力を利用してピストンを動かし熱エネルギーを回転運動、並進運動の力学的な運動エネルギーに変化させ、機械を動かすことができる動力源、原動機が生まれたのです。動力源ができれば、それを伝達する装置、伝達されたエネルギーを使って仕事をする作業道具の改良や発明が後に続きます。明確な目的を持って自然の素材に働きかける機械が次々に開発され、機械式大工業に発展するのは時間の問題です。蒸気機関は鉄道や船の交通輸送手段も大きく変化させます。熱エネルギーを生み出したのは、化学エネルギーです。木材や、石炭・石油な

どの化石燃料を燃焼させ、物質から化学エネルギーを解放し利用します。化学エネルギー ↓ 熱エネルギー ↓ 力学的エネルギーという方向のエネルギー変換です。エネルギーのこの変換過程は、機械的な言い方をすれば、人間が食物を口にし、それを空気中から呼吸で体内に取り入れた酸素で燃焼させ、食物から解放された熱エネルギーを利用して身体を動かしている過程と同じです。その後、化学エネルギー ↓ 熱エネルギー ↓ 力学的エネルギーという方向のエネルギー変換は、一九世紀以降、ガスやガソリン・軽油などを燃料として利用する内燃機関(Internal-combustion engine)が発明され、効率化が進み今日に至っています。ちなみに、蒸気機関は外燃機関です。

年、イタリヤ)による「動物電気」の発見でした。ガルバーニは、蛙の脊椎に銅製のフックを挿入し鉄製の棒につるしたときカエルの足が鉄棒に触れると足の筋肉が収縮することに気づきました。彼は考えました。もともと蛙の中に電気が存在していて、それに二つの金属が接触して電気が流れ筋肉が収縮した、と。インターネットもない時代にこの情報がどう伝わったのか、ヨーロッパ中で我も我もと追試実験が行われ、おかげで沼地から蛙が姿を消し、銅の針金も品薄になったそうです。ほんまかいな。まるで、よもだ話のよう。

さて、ここまでの話でエネルギーの四形態が登場しました。熱、光、力学的エネルギーおよび化学エネルギーです。人類のエネルギー利用で重要なものがあと二つあります。電気エネルギーと核エネルギーです。これでエネルギー六形態が出そろいます。

もう一つ、この時代のよもだ話を、しかしこれは本当の話。電池が発明されたのは一八〇四年フランス皇帝になったナポレオン・ボナパルトの時代です。戦争に持参する長期保存食料についてナポレオンが懸賞を出し、それに応えてガラス瓶詰が発明されました。しかし瓶詰は、携行するには重くて割れやすい問題があり、やがて金属を使う瓶詰が発明されました。それでも缶詰は普及しませんでした。なぜだと思いませんか。缶切りがなかったからです! 金槌とノミがなければ缶詰を開けることはできなかったのです。ブリキ製の薄い金属板で缶詰がつくられ、缶切りが発明され普及したのは、ナポレオン没後四〇年も経った一八六〇年代のことでした。缶詰まで戦争が生み出した! まあ、当たり前のことですかね。小学生

電気エネルギーが関係する自然現象には、摩擦による静電気の発生や雷鳴があります。しかし、物理的な仕事を行わせることに関わって実用化された電気エネルギーとなると、電池や発電機の発明をまたなければなりません。電気エネルギー実用化の最初は電池の発明です。ことこの発端は、ガルバーニ(一七八〇

の時、「必要は発明の母」と聞きましたが、「戦争は発明の母」です(母ちゃん、ごめん)。今度百円缶詰を食べるときには、そんなことにも思いを致してみようと思えます。それにしても、今では缶切り不要の「イージーオープンふた」(JISの用語。英語で Easy open ends)の缶詰が当たり前になりましたが、缶コーヒーや缶ジュースなどのふたと同様に、「お前、年寄りをいじめるのか」というくらいに開けにくいものが多いですね。そのくせ、「ふたで手を切らないように」などと書いていたりします。安全で開けやすいふたの発明に科学技術の進歩を生かしてほしいものです。日本は、そんなところにも今や洗練された技術が失われたのかと感ずるのは、まあ年寄りのひがみでしようね。

閑話休題、しかし、ガルバーニとは別の考えをした人もいました。二つの異なる金属から電気が発生し、蛙の足に電気が流れて筋肉が収縮したのではないかと。そう考えたのは、ガルバーニと同じイタリアのボルタです。彼は、一八〇〇年ボルタの電堆(でんつい)と呼ばれる、いわゆるボルタ電池を発明します。異なる二種類の金属、たとえば銅板と亜鉛版の間に、動物ではなく塩水のような電気を通す導体(専門的に言うと、電解質溶液です)を浸みこませた布を挟んで電堆をつくと、金属板から安定な電流を取り出すことができることを示したのです。

電池は、自然に、つまり自発的に起る化学反応を介して物質が持つ化学エネルギーを電気エネルギーに変換する仕掛けです。ボルタ電池の発明は、直ちに科学上の新発見を次々に生み出します。同じ年の一八〇〇年には、カーライルとニコルソン(イギリス)により、水が水素と酸素に電気分解されます。一八〇七年には、金属ナトリウムとカリウムがこれら金属の熔融塩の電気分解により分離されます(デービー、イギリス)。マグネシウムやカルシウムも分離されました。新しい金属元素の発見です。こうした物質の電気分解は、電気エネルギーが化学エネルギーに変換されるという、電池とはまさに逆のエネルギー変換です。

ここで横道にそれますが、デービーの弟子にフアラデーがいました。彼は貧しい出身で、十分な教育も受けないまま一三歳から書店・製本所で働いていましたが、そこに入って来る科学書に興味を持ったといひます。二二歳のとき、王立研究所(Royal Society of Chemistry)の一般公開されたデービー卿の連続講義を聴く機会を得ます。そして、その時フアラデーが記録した講演筆記ノートに感心したデービーの助手に翌年採用されます。化学者フアラデーの誕生です。一八三三年には電気分解の法則を発見するなど、デービーの電気化学に関する研究を完成させて行きます。研究者として自他ともに認められていくのですが、なかなか王

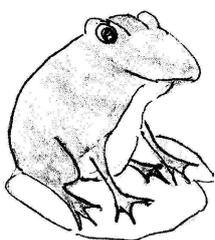
立化学アカデミーの会員にはなれませんでした。出る杭はうたれるのとおりか、いつまで経っても「十年早いよ」と弟子が目立つことを師が許さなかったのか、デービーが最後まで反対したとも言われています。しかし、こういう話も伝わっています。デービーの晩年のことです。病床にあるデービーにある人が、「先生は偉大な発見をたくさんされましたが、最大の発見は何であるとお考えですか」と尋ねたとき、デービーはただ一言こう答えます。「フアラデー!」、と。(こういう師弟関係、私は好きだなあ)それはさておき、フアラデーが王立化学研究所で一般公開した演示実験・講演の記録は『ローソクの科学』として今でも岩波文庫などで読むことができます。じっくり読むと面白いですよ。

さて、このフアラデーは、一八三一年に電場と磁場の相互作用に関する電磁誘導の法則を発見します。簡単に言えば、この法則に基づいて、磁石の間にコイルを置きコイルに電流を流すとコイルが回転するモーターをつくることができます。電気エネルギーの力学的エネルギーへの変換です。さらに直感的に理解してください。逆に、モーターのコイルを適当な方法で回転させれば力学的エネルギーの電気エネルギーへの変換で電気が得られるのではないかと。昔から自転車についている発電機はその例ですが、実は、水力発電であれ、火力発電であれ、風力発電

であれ、原子力発電であれ、力学的エネルギーを電気エネルギーに変換する発電機の原理はみなこれです。ただし、水力発電と風力発電では水または風の持つ力学的エネルギーが直接発電機に伝えられます。一方、火力発電では、化学エネルギー↓熱エネルギー↓力学的エネルギーの変換過程が先行し、原子力発電では、核エネルギー↓熱エネルギー↓力学的エネルギーの変換過程が先行します。なお、太陽光発電の原理は電磁誘導の法則とは無関係で、光エネルギーから電気エネルギーへの変換に発電機は関与しません。

以上、エネルギーの諸形態と人間のエネルギー変換・利用のごく一端を紹介しました。次回は、放射線と物質の相互作用をエネルギー的に考察し、放射線の怖さについて考えてみます。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)



ジャズを楽しみませんか

駒田明克

最近、中高年の間で密かにジャズが広まっているそうです。今に成って何故ジャズなのか。不思議な気がします。

それは、最近のテレビ等の音楽番組のクダラナサに起因していると小生は思います。流れる音楽といえば若者向けのAKB48やジャニーズ系の意味不明なアップテンポの曲、ときたま流れるNHK好みのいつもの演歌歌手の面々の色あせた持ち歌、しかも昔のように声が出ないのをカバーするべくアレンジを加えて歌っている。以前耳にした感じと違い違和感を感じます。

昔は日本の歌も、ほとんどの曲はプロの作曲家、作詞家によるものでした。阿久悠さんのセンスは最高でした。

今はシンガーソングライターと称する未熟者が曲を作っているケースが多く、おおむね深みのない、うわすべりな曲となっています。

また外国から入ってくる曲も以前は映画音楽として流れる曲が主体で、洋楽ファンとしては、すばらしい曲に接し、たまらないものでした。

「慕情、太陽がいつばい、マイウエイ、魅惑の宵、思い出のサンフランシスコ、枯葉、バラ色の人生、シェルブールの雨傘、追憶」等々いつでも口ずさめます。

この外国の曲も、最近ではコンピュータ・グラフィックを駆逐した映像に毒されてかアップテンポの曲ばかり、心に残る曲はほとんどありません。

また、歌手も記憶にあるのが「フランク・シナトラ、ナットキングコール、ルイ・アームストロング、プレスリー、バット・ブーン、マイケル・ジャクソン、アンディー・ウイリアムス」等々すこいメンバーが活躍しておりました。しかし、最近の歌手は名前が浮かびません。

このような音楽界の状況下、中高年層の音楽好きのなかには特にこれまでジャズが好きというわけでもないのに、なぜかメロディーが頭に残っている。

改めてジャズを聴くと、いつしかのめり込んでいく、そんな人が増えてきた結果、静かなブームとなっていると思われ

ます。

かきいう小生、若い時から音楽は、特にジャンルを問わず好きでした。これまでに生の演奏を聴いたのは「クラシックギターの巨匠アンドレス・セゴビア、禁じられた遊びのナルシソ・イエベス、クラリネットの鈴木章二、天使のさやきのスリー・デイグリーズ、チェロのヨーヨーマ、煙が目にしみるプラターズ、渚のアドリーヌのリチャード・クレイダーマン、晩年のバート・バカラック、トランペットのニニ・ロツソ、魅惑の歌姫サラ・ブ

ライトマン」等々色々なジャンルの演奏家や歌手です。

ジャズに関しては若い時に、特に好きという訳でもなく何とはなしに四大ドラマー競演というところで、アート・ブレーキー、バディ・リッチ、シェリー・マン、マックスローチのドラム合戦を名古屋で聴きました。ジャズのフルバンドの演奏はよく聴きました。「東京キュウバンボーイズ、原信夫とシャープスアンドフラッツ、ペレスブレード楽団、有馬微とノーチェクバーナ」等です。

有馬微とノーチェクバーナでアルト・サクスを吹いていた塚本耕一郎さんは松坂にケニー音楽院を開設しており、何度か演奏を聴きに行きました。

今、三姉妹がツカモトシスターズとして活躍しております。

小生、二年程前からジャズボーカルのレッスンを受けております。この年に成って暫くジャズが面白くなってきました。今まではジャズは聴くものと思っ

て居りましたが、ひよんなことからジャズシンガー綾戸智絵のバックをつとめたことのあるMikiko先生のジャズボーカルの講座を知り、ジャズボーカルを始めました。

えませんが、英語の歌詞を覚えるのが大変です。なかなか暗記できません。

時々人前で歌うこともあります。この頃では上ることもなくマイペースでやっています。歌い終わるとスツとした快感があります。

ジャズは、二〇世紀の初頭、アメリカ南部のニューオリンズで産声を上げ、約一〇〇年が経ちました。ブルースやラグタイムの影響を受け、デイキシーランド・スタイルからスウィングへと移り変わり、いまモダンジャズとして広く深く浸透し、確固たる音楽ジャンルを築き上げております。

ジャズの演奏の魅力はなんといっても、アドリブにあります。何を吹いても自由なので演奏する人の感性によって表現が違い、同じ曲でも演奏者によってこれがあの曲かと思うこともあります。

是非、一度ジャズを生演奏で聴いて下さい。

取りあえずYOU TUBEでジャズのスタンダード・ナンバー(定番曲)となっている次の曲を一度聴いてみて下さい。

「Fly Me to the Moon, A列車で行こう、Moonin', Take Five, セントルイス・ブルース、バードランドの子守歌、マイ・ハアニー・バレンタイン、Too Young, Stardust」

世界一周旅行記（その5）

世界とは人類とは何か

若山哲郎

海賊の海とアフリカの島

平成一三年一二月八日沈みゆく島、モルディブを離れた翌日から船は特別警戒体制に入りました。噂では聞いていましたがソマリア海賊対策です。へえ、今でも続いているのかという感じでした。海賊とは、それこそアニメの中のピーターパンでのフック船長のようなイメージですが、時代は違ってもやることは同じだそうです。しかし問題はソマリアという国が自国の違法行為を取り締まれないということにあります。

ソマリアはアフリカの角と呼ばれているごとくに大陸の北東角にあり、インド洋からスエズ運河へ入るアデン湾に面しています。そもそもアフリカ全域は第二次大戦まですべてヨーロッパの列強国の植民地下にあり、ソマリアもイギリスとイタリアに分割統治されていました。戦後一九六〇年にソマリア族という単一民族が集まりソマリアは独立しました。しかしその後、これも他のアフリカ諸国と同じように米ソ冷戦終焉後、部族対立が激化し現在は隣国エチオピアの支援を受けた南部の暫定政府と北部の2分割された自治政府があるがいずれも国際承認されていません。すなわちソマリアは現在、

国家として機能していません。

でも、なぜソマリアに海賊がいるのか。諸説あるのだから確かなことはわからないのですが。もともとソマリア沖は自国では消費しないマグロの豊富な漁場で日本も含めた西欧各国が相当に支援して漁民を育てたが、無政府状態になった後、その漁場にこれも先進国が汚染廃棄物を投棄し結果、漁ができなくなった漁民が窮乏の果てに海賊行為に出たとか。これまたグローバル化という大国の都合のいいやり方ですね。その他には部族の私設軍隊が資金稼ぎのためにやっているとか言われています。いずれにせよ、問題は自国が取り締まれないことが問題なのです。

インド洋からアデン湾は中東やヨーロッパへ向かう船の要通路。海賊にとっては好機の多い絶好のエリアです。対策はまず避難訓練からはじまります。海賊船といっても外見は漁船、発見した場合まず全船放送で船長が「ブローボータンゴ」と発声します。この合言葉は海賊船発見という国際船舶用語らしいのですが、これを聞いた乗客は直ちに自分の船室に戻り鍵をかけて待機します。遭難訓練と異なるのは自室から外へ出ないということです。海賊の目的は昔から、今も変わらず、人命ではなく金品財宝です。海賊船は近づいて来て強引に横づけし、一見、漁民風の武器をもった集団が船を乗っ取るのだとか。その時船内をうろうろ

していると拉致され金品を取られます。しかし、かれらにとって個人の金は本来の目的ではなく、もつと多額の金額を要求するのです。そのために拿捕した船を彼らの基地に連れて行き、そこで船会社や国と交渉します。最近では身代金専門の代理交渉会社があつてそこがスムーズにコンタクトしてくれるとか。

海賊対策説明会や訓練を受けるにつれて、最初はリアルさがなく軽く考え、笑顔で聞いていた私たち乗客もだんだんと少し緊張した気分になってきました。夜に船の明かりがもれると海賊船から発見しやすくなるというためすべての窓がダンボールなどで覆われカーテンも常に引かれました。事実、二〇〇九年五月にこのクルーズは海賊船に追いかけれられ自衛隊の保護を受けています。その時の体験者が同乗していたので話を聞きました。今もそうですがピースボートというのは建前では戦争反対で憲法九条を守るという組織。そこから自衛隊の存在を認めないという立場にあるため当時、自衛隊の保護要請をするかどうか議論があつたらしいのです。しかし、結果、救援要請をして守られながら航行したということです。実際は海賊船から逃げるためかなりの速度で蛇行運航してその時は自力で逃げ切れたとのこと。当時の日本国内では丁度、自衛隊の海外派遣の問題でもめていた時期でしたのでマスコミでも面白おかしく書かれていました。この手の議

論というかバッシングは多いですね。自衛隊に反対しているなら助けを求めるとか、原発に反対しているなら電気をつかうなどという論理です。これが極端になるとそれこそ日本に反対なら出で行けという、例のヘイトスピーチにもつながる考え方です。一部を否定することが全体を否定していることになるというなんとも短絡的で幼稚な理屈ですが、これが現在主流の考え方だとすると恐ろしく排他的な世の中に逆戻りしたものです。

さて、このような重苦しい雰囲気の中を五日間ほど過ごしたあと海賊船体制はやつと解除になりその後、素晴らしい体験をしました。一月二三日、赤道を越えたのです。飛行機などでは赤道越えは自分自身も何度かあつたと思いますが、船での通過ははじめて。全員、赤い服や赤いものをもって甲板にでて記念写真。赤道では太陽は真上になるので影はできません。これも船旅ならではの体験です。次の日の一四日に、モーリシヤスのポートルイスという港に船は停泊しました。この島もアフリカ大陸に近いインド洋のリゾート島です。この国はイギリス連邦に属する独立国で、観光産業の他にマグロ漁やサトウキビ産業などによりアフリカ諸国の中でも豊かな国に属しています。私はこの島で、ツーリズムを考えるとどうツアーに参加しました。観光産業が島の住民にどのような影響を与えているのかを見る旅です。バスで小一時間走った

だといってオプシオンツアーの準備をしています。わざわざ飛行機で島の奥地に行かなければならないとか。それまでして見たい木とは何なのですか、と聞いてみた。それはお話、星の王子様に出てくる木とか。知らなんだ。いい歳のおばさん達も多勢行くので有名なだろう。写真でみると成る程、奇妙な木です。乾燥に強く、木の中に水を蓄えられ、花から蜜がとれたり、果実も美味しいとか。観光資源になっていきます。さてマダガスカルは世界で四番目に大きな島ですが国は大変困窮しています。ここも一九六〇年にフランスから独立国したのですが、それ以前からも大した産業育成もなく軍事基地としてのみ機能していたため今でも非常に貧しい国です。マーケットへ行く

と子供たちが寄って来て物乞いをはじめます。それは子供の意志でやっているのではなく親がビジネスとして子供を使い金を稼いでいるのです。そんな時は小銃をもった軍の兵隊がきて子供達を追い払います。観光客に貧しいところを見せないためでもあります。政治も安定していません。特権階級が金で軍事力を背景に権力を持ち貧富の格差を利用し国を支配しています。表向きは選挙があり、議会があるのですが、国民の多くは字が読めず書けません。

私はこの島でのツアーは自然公園観光を選びました。軍隊のジープに先導されてマイクロバスでジャングルを二時間ばかり走りました。途中の道は穴だらけ、雨は池のようにたまり何度か迂回をしたり、降りて歩きました。時々通過する村は非常に貧しく、子供はほとんど裸同然の格好でした。自然公園に到着してカメレオンやらいろんな猿を檻の中に見ました。普通の動物園です。お目当てのアイアイは夜行性のため昼はお休み中、姿を見せません。やががっかりでまた来たガタガタ道を戻りました。日本の一〇〇分の一の経済状態、しかし貧しいのは国を全体ではなく一部の階層は大変裕福。こんな状態だから紛争や宗教対立が起るのであろう。マダガスカルは今のところ大した資源はないがこれが天然ガスとか石油ができれば再び大国の利権に翻弄され国が困窮するのである。そんな時、犠牲になるのはいつも貧しい子供達です。もう船へ戻らなくてはいけない時間になったとき財布をみてみると小銭がいくらか残っていた。スタッフからは物乞いには絶対お金を与えないで下さい。彼らの自立を妨げるからですという説明を聞いてはいたが、つい寄ってきた子供にお金をあげてしまった。子供と目が合ったときこれで親に褒められるという喜びの笑顔を手にとった。自己満足かもしれない。

いよいよあと三日でアフリカ大陸上陸。どんな世界があるのか。漆黒の海原に未知なる大陸を目指し、船は島を離れた。

バター の 効用

大江 雉 寛

頭の上にカモの卵ぐらいのバターを載せてみる。するとそれは芳香を漂わせながら頭を湿らせ、身体の中を染みこむように下ってゆく。それに随って体内の病理も、水が低きに就くかのごとくに足先へと向かい、そして消えてしまう……。

紹介する人が変わればアレンジも異なるようだが、瞑想による暗示治療として語られる方法である。「氣」が頭頂から体内を巡り下って病根を消し去るということのだが、それをバターの喩えを使ってイメージしやすくしたものと言えがいいだろうか。喩えで用いられるものがバターであるということや、循環のイメージが具体的であることが好まれるのだろうか、出典から切り離されて一人歩きしている傾向がないでもない。

この秘術の出どころがどこかというところ、臨濟宗中興の祖と崇められる白隠慧鶴の著作に求められる。禅師晩年の書『夜船閑話』に描かれている「内観の法」である。原文の方を少し覗いてみよう。

譬へば色香清浄の軟蘇鴨卵の大ひさの如くなる者、頂上に頓在せんに、其気味微妙にして、遍く頭顱の間をうるをし、浸々として潤下し来て、両肩及び双臂、

ところにシヤマレル村というリゾート地がありました。日本人がここに来るのはじめてということで歌や踊りで歓迎してくれました。その後、何か聞くことはありませんかと言われたので単刀直入に聞いてみました。リゾート地になって昔とどう変わったか。文明生活をどう思うかと質問すると以外な答えが返ってきた。娯楽施設がある街ができ若者がそこへ集まり、酒やタバコ、良くないことをするようになったという。私たちは若者たちにもっと健全な生活をしてもらうためバスケットボールやサッカーなどの運動施設を作りたい、そのためにもっとお金が必要だということです。文明の発展は一度経験すると戻りません。現在の文明というものは人間の欲望の実現だからです。テレビ、携帯電話、インターネット。人間の欲望は限りない、これを紛らすのもまた文明の力を借なければなりません。悪循環には入りこんでしまっているのでは。それでも何処かに出入り口があるのでは。この旅はそれを探す旅でもあります。

その夜、船は次の寄港地、アフリカ最大の島マダガスカルに向け出港しました。島はアフリカ大陸のすぐそばにあり中日でトアマシナという街に着きました。マダガスカルという国はお猿のアイアイで知っているくらいでその他は何も予備知識はありませんでした。しかし比較的若い人たちはバオバブの木を見に行くの

両乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁髀骨、次第に沾注し將ち去る。此時に當て胸中の五積六聚疝塊痛、心に随て降下する事水の下につくが如く、歴々として声あり遍身を周流し、双脚を温潤し、足心に至て即ち止む。

単語の一つひとつが難しくて厄介極まらないが、「軟蘇」なるものを頭の上に置いて云々という流れになっているので、冒頭でダイジェスト風に紹介したもので問題はなはずである。それでもキーワードになる「軟蘇」ぐらいいは説明するなら、軟らかい蘇といったところか。蘇は奈良時代の木簡にも記されている食品であり、乳製品の一種であることが知られている。現代人が感覚的に理解しやすい食べ物の中で探せば、バターやチーズあたりが近いことから「バターの塊を頭の上に置いて」といった形に処理される。さて、このように原文とつきあわせてみると、冒頭に挙げたダイジェストにはそんなに目くじらを立てるには及ばないのかも知れない。しかし、断片的な語句の解釈に問題はなくても文脈を意識するとどうだろう。本当に「瞑想による暗示治療」と見なしていいのだろうか。そもそもこのところ『夜船閑話』に紹介されている「内観の法」とは、どういう流れで出てきているのかというと、白隠禪師によるレトリックが多分に関わっている。

世の中には「嘘も方便」という言葉がある。『夜船閑話』の世界は、まさしくこの「嘘も方便」に満ち溢れている。まず序文からしてそうである。白隠禪師に近侍する者が禪師の荷物の中から一冊の古書を見つけたのだが、そこに記されていたのは、若き日の禪師が会得した「神仙丹練」の秘術、そしてそれを広く世間の人にも知ってもらおうべく……という内容である。ところが、実はその序文を書いたのが他ならぬ白隠禪師その人であったりする。

また「内観の法」についても、一步引いたところから眺めるべきだろう。『夜船閑話』では、京都は北白川の山中に住む仙人より伝授されたことになっている。「白幽子」の名前で呼ばれた隠者がいたことは本当らしいが、実在の白幽子と『夜船閑話』の白幽子が重なる保証はどこにもない。むしろ、噂に聞いた白幽子の口を借りて、白隠が「内観の法」なるものを披瀝していると考えた方がよさそうだ。

もちろん『夜船閑話』がフィクションだとしても、その内容を方便と割り切ることは大切である。ここでいう方便とは、仏教語として用いられる専門語、すなわち衆生を悟りに導くための方法のことである。白隠禪師の著作には「おたふく女郎の粉引き歌」というものがある。『夜船閑話』と並ぶ禪師の代表作なのだが、ここでは「主心お婆々」が七・七・七・五の俗

謡形式に乗せて菩提心の大切さを歌っている。その「主心お婆々」が実在か否かは問うに及ばないはずである。禪師自身が自らの主張を述べさせる仮託として呼び出されているに過ぎない。それと同じで『夜船閑話』の白幽子も、禪師自身の代弁者なのである。

そうすると肝心の「内観の法」はどうなるのだろう。話はフィクションなのだが、言わんとする主旨は禪師の思想そのものであるとすれば、頭の上にバターを載せて云々をどう扱えばいいのか。答えはおそらく簡単である。言葉尻を捉えて嘘だとか本当だとかを言っている限りは、まったく埒が開かない。『夜船閑話』の流れや論旨の展開などを踏まえた上で「内観の法」を理解する必要があるということである。したがって先に書き抜いた「譬へば色香清浄の軟蘇……」といった部分だけで話をしていうよりは、何の役にも立たない。文脈を正確にたどること、すなわち「内観の法」の前提として述べられている老荘や陰陽などの神仙思想、あるいは漢方医療だの仏教的宇宙観だのにも目配せしなければならない。そうなるに難解ささすべき教的に跳ね上がったままうのは言うまでもない。「頭の上にバターを」云々といったユニークさばかりが注目されるわけだが、実のところは極めつけに難解な瞑想法というべきなのである。

|| || 広告 || ||

一〇月二五日(土)

「北白川と瓜生山(白幽子を訪ねて)」

北白川に残る白幽子ゆかりの古跡を歩いてみませんか(フチハイキング、歴史散策)。

おもな立ち寄り場所は、「白幽子古跡、瓜生山、狸谷不動院」です

京都クルーズ・ザ・プロジェクト主催

お問い合わせ・お申し込みは

<http://kyoto-cruise.sakura.ne.jp>

